

教育学部・教育学研究科 授業評価報告書

2010 年度

京都大学大学院教育学研究科

部局自己点検・自己評価委員会

□ はじめに

辻本雅史（大学院教育学研究科長）

教育学研究科・教育学部では、2005年度より、毎年、学生による授業評価を実施しております。2010年度も、自己点検・評価委員会によって、授業評価が実施され、その結果が本報告書にまとめられました。今年は、これまで対象としてこなかった教職教育科目について実施した点が、大きな特徴です。そのために、とくに教職教育委員会の協力を得て実施されました。何かと多忙をきわめる教職教育委員会の委員に対して、改めてお礼申し上げます。

京都大学では、高等学校教諭、中学校教諭および特別支援学校教諭の教育職員免許状の取得が可能ですが、教育学研究科は、その教職教育科目を提供する責任部局です。いいかえれば、京都大学の教員養成に責任をもっているのが、教育学研究科です。文部科学省は教員の質の向上めざしてとりわけ教職教育科目を重視する姿勢を強めるなか、本学もそれに十分に応えるための努力が求められているわけです。もとより教職科目は、本学全学部・研究科の受講生に開かれており、さらにその授業を担当する教員も、他部局や非常勤講師の先生方もおられます。しかし他方で、授業自体は、学校教員養成という目的を持っている点で共通しています。そうした点で、これまでの学生の授業評価とは異なった傾向が予想されました。この報告書を見る限り、比較的高い満足度と高い達成度が示されているようです。

教職科目について自己点検・評価を行い、その改善に努力することは、教育学研究科の全学に対する責任であり、ひいては学校教育の現場に対する責任でもあります。教員養成に関わる授業を対象とすることは、文字通りの自己点検そのものといえます。良き教員を目指す学生に対してなされる授業を問うものであるからです。良きモデルとなる授業だけがよい授業とは言えないかも知れませんが、熱意をもって自らの授業改善に努める姿は、必ず学生に届くはずで

これで、研究科長室の書棚に『授業評価報告書』の6冊目が並ぶことになりました。もちろん、数を重ねることに意味があるわけではありません。学生によるこれらの授業評価の結果をいかに受け止め、私たちが、日々の授業改善にいかに活かしていくのか、それが重要であることは言を俟ちません。教育学研究科では、そのために、これらの報告書とその分析結果をもとにして、全教員が参加したFD研修会を重ねてきました。さらに、これらの報告書はすべて教育学研究科のホームページで公開しており、誰もが自由に見ることができます。学生諸君にもこのことは周知して、教育学を学ぶ学生とその教員とが、授業をめぐって双方向に意味ある議論の資料となることを願っています。

2010 年度学生授業アンケート集計結果

□ 1. 学生による授業評価について

§ 1.1 今回の学生による授業評価について

本報告書は、2010 年度に行った教育学研究科による第 6 回目の学生による授業評価アンケートの集計分析報告である。これまでのアンケートは教育学研究科（教育学部）の提供する講義、演習を対象に行ってきたが、今回ははじめての試みとして教職教育科目について実施した。教職教育科目ということで、提供主体が教育学研究科だけでなく、京都大学全学に及ぶため、教職教育委員会の同意と協力のもとに行った。

時間的制約から後期開講の授業を対象とし、10 月初旬に教職教育科目を提供しているすべての担当者（非常勤講師を含む）に、自己点検・評価委員会委員長と教職教育委員会委員長の連名で、協力の依頼をおこなった。10 月末までに 16 の授業の担当者より協力の回答をいただき、11 月中の実施を依頼した。12 月初旬の締め切りまでに 12 の授業の担当者よりアンケートが回収できた。いずれも便覧の授業形式としては「講義」と分類されるものであったが、概論を中心とした講義中心の授業 6、教科教育法を中心とした実践志向の授業 6 についてデータが得られた。回答数は前者が 371 人、後者が 178 人、合計 549 人であった。そのうち不備等による除外により 533 人を分析対象とした。

§ 1.2 教職教育科目を対象にした理由

これまでの学生による授業評価アンケートは、主として教育学部・教育学研究科が開講する講義や演習を対象とするものであったが、今年度ははじめて京都大学が開講する教職教育科目をその対象として調査を行った。その背景としては周知のとおり、教員免許更新制が平成 21（2009）年 4 月より導入され、それに伴い、平成 20（2008）年 11 月 12 日の「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」により、2010 年度以降、大学に入学して教職課程を履修する学生には、「教職に関する科目」のひとつとして「教職実践演習」（2 単位）が平成 22 年 4 月の入学学生より必修化されてきている。その趣旨は教職教育科目を履修し、教員免許の取得を目指す学生に対して、教員として必要とされる資質・能力の獲得を保障するために、学生の系統的な履修履歴の把握と管理が推奨されている。

そのひとつの手掛かりとして、課程認定委員会は平成 20（2008）年 10 月 24 日に「教職実践演習の実施にあたっての留意事項」において、演習を円滑に実施するための準備事項として「履修カルテ」の作成を奨励し、「履修カルテの活用方法（例）」を提示しており、本学でも、教員に必要とされる資質・能力に関して以下の 4 つの内容と、その具体的な 12 の到達目標を意識した教育課程の編成が試行されている。

- 1 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項（下記項目 a～c に該当）
- 2 社会性や対人関係能力に関する事項（下記項目 d～f に該当）

3 生徒理解に関する事項(下記項目g～iに該当)

4 教科等の指導力に関する事項(下記項目j～lに該当)

そこで本委員会は、教職教育委員会の協力のもと、現行の教職教育科目において、このような教員の資質・能力の育成・獲得努力が、学生によってどの程度意識されているのか、またどの程度獲得されたと認識されているのか、以下の問7(1)において12項目を尋ねてみた。質問項目は以下のとおりである。

問7(1) 次に挙げる各項目は、教師にとって重要な資質・能力とされています。あなたは、この授業を通じてそれぞれの資質・能力の重要性を、どの程度(再)認識することができましたか。回答用紙の該当箇所の○を塗りつぶしてください。

- a. 教育に対する使命感や情熱
- b. 高い倫理観と規範意識
- c. 生徒の成長や安全を重視する心構え
- d. 教職の目的や状況に応じた適切な言動
- e. 他の教職員との協調性
- f. 保護者や地域の人々との関係づくり
- g. 生徒に対する公平かつ受容的な態度
- h. 生徒の発達課題の理解とそれに基づく適切な指導
- i. 規律ある学級経営能力
- j. 教科などの知識や技能
- k. 板書や話し方・表情等にあらわれる表現能力
- l. 授業計画や学習形態を工夫する能力

ただし、このアンケート項目は、現行の教職教育科目がどの程度教員に必要とされる資質・能力を保障しているかの、到達度を評価することを目的とするものではないし、その評価を行うことは不可能である。その理由は、第一に、教育課程委員会などによる上記資質・能力の内容および目標の項目に関して、事前に本学教員間に一般的合意が得られたうえで、これらの授業が行われたものではないこと、第二に、新制度による教職実践演習が必修化されるのは、平成22年度入学の学生からで、本アンケートに回答した学生のすべてがそれに該当するわけではないこと、第三に、このアンケートに答えた学生のすべてが教職を目指しているわけではないこと、第四に、このアンケート項目は学生の側の自己認識を尋ねたもので、学生の側の目的や授業への意識、個人的条件に大きく左右されることがあげられる。

しかしそれにもかかわらず、現時点で本学学生がこれらの科目を教員養成という観点からどのように認識しているかを知るという点で重要な情報を提供してくれる。

§ 1.3 新たに加えた質問項目と質問紙の改善点

新たに加えた質問項目は上記§1.2 に示した、問 7(1)の 12 項目である。またそれに関連して、(2)上記 12 項目「以外で、あなたがこの授業をとおして得られたと思う教師にとって重要な資質・能力があれば、あげてください」という自由記述欄を設定した。

これに関連して、回答者自身についての設問、問 0(2)において、この授業を教職科目として受講しているか、専門科目として受講しているか、あるいは両方の目的において受講しているかについての設問を設けた。また一部の科目は全学共通科目として開講されているので、その回答肢も設けた。

- (2) この授業を教職科目として受講しているか、専門科目として受講しているかに関して、該当箇所の○を塗りつぶしてください。

()教職 ()専門 ()教職・専門 ()全学共通 ()その他

§ 1.4 実施した授業科目

表 1 学生アンケートを実施した授業科目

記号	科目名	曜日	受講人数	担当者名前	実際の回収数
A	教育課程論 I	水 2	317	田中耕治	155
B	比較教育学概論 II	木 2	159	杉本均	54
C	民族と教育	水 3	70	杉本均	31
D	教育学概論 II	金 2	152	山名淳	63
E	理科教育法 II	水 4	89	山下芳樹	23
G	教育政策学概論 II	月 2	93	高見茂	36
I	国語科教育法 II	木 2	47	広滝道代	26
J	教育社会学概論 II	月 4	111	稲垣恭子	32
K	数学科教育法 II	金 1	74	小寺隆幸	48
L	教育相談	金 1	45	後藤智子	22
M	特別活動の理論と実践	金 1	254	川地亜弥子	59
総計			1411		549

*受講人数とはその年度に当該科目の履修を教務掛に登録していた人数であり、実際にアンケート実施日に受講していた学生数ではない。

□ 2. 「学生による授業アンケート」の結果と分析

§ 2.1 回答者の属性

今回アンケートを実施した授業の数は12（概論ほか6、教育法ほか6）である。今回配布数を集計していないが、授業中にアンケート配布後、終了時には回収しているため、回収率はほぼ100%に近いものと想定できる。しかしアンケート自体が後期後半の11月を中心に行ったことから、また教職教育科目の授業はさまざまな理由で欠席が多いので、授業の登録人数1411人に比べると38.9%ということで、登録者に占める代表性は十分に高いとはいえない。

回答者の所属学部・研究科は、教職教育科目が全学に対して提供されていることから、当然のことながら大きく分散した。所属部局はほぼ全学部にわたり、教育学部がのべ134人、25.1%、総合人間学部がのべ37人、5.0%、文学部がのべ113人、21.2%、法学部が1人、0.02%、経済学部がのべ9人、0.2%、理学部がのべ117人、22.0%、医学部がのべ4人、0.08%、工学部がのべ46人、8.6%、農学部がのべ39人、7.3%、その他がのべ33人、6.2%であった。ちなみに前回の教育学部の授業を対象とした調査での教育学生の比率は63.3%であった。

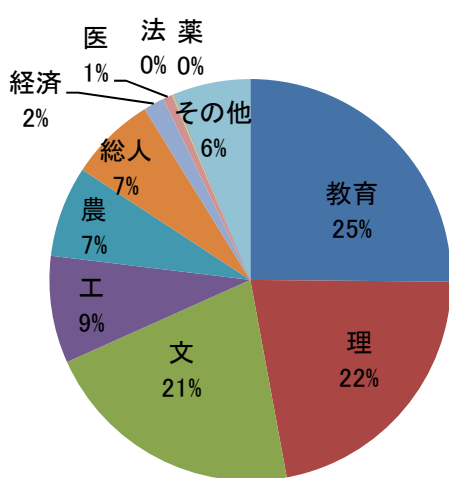


図1 回答者の所属

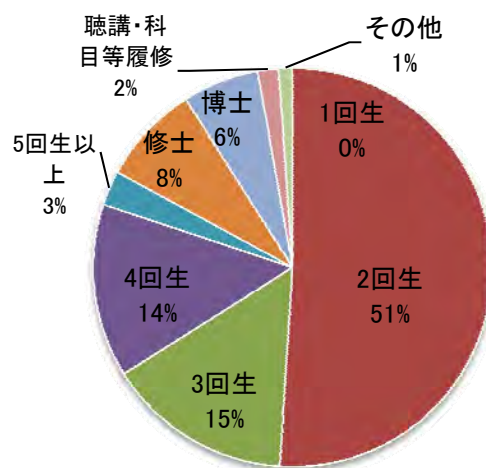


図2 回答者の学年

回答者の学年については、教職教育科目が2回生以上の開講科目であるので、1回生の回答はなかったが、2回生が51.0%と過半数を占めた。また教育実習や介護等体験、教員採用試験が多くは4回生に入ってくることを考えると3回生は15.0%、4回生は14.1%ということで、上回生が少ないことも理解できる。しかし一方で、大学院生の受講もかなりあり、修士課程が8.1%、博士課程が6.2%ということで、学年の幅はかなり大きい集団といえる。

性別では男性が350名で65.8%を占めた。女性は43.2%であった。これまでの調査は教育学部の授業が中心であったので、男女比がほぼ拮抗していた（2009年度で男性51.7%）

が、全学から受講する教職教育科目では京都大学全体の男性比率 78.4%(学部)を反映して、男性の比率は例年より高くなっている。教育学部生の入試の文系・理系の別では、理系入試経験者はのべ 22 人で、全体の 16.4%であった。理・医・工・農学部の学生を理系とすれば、教育学部の理系入試者を加えて、理系はのべ 228 人、42.8%に達する。(総合人間学部は文系・理系の別を聞いていない)

これらの授業を教職単位として受講していたのはのべ 452 人で 84.8%であり、これらを専門科目として受講していたのはのべ 107 人、20.1%であった。これら双方には教職としても専門科目としても両方の目的で受講していたのべ 56 人、10.5%が含まれている。

§ 2.2 アンケート全体の結果の分析

■問 1 の分析結果

問 1 では、「この授業について、満足している／得たものがある／役に立った」という点について、あてはまるか、あてはまらないかについて尋ねた。この結果を図 3 に示した。「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」と回答したものの割合を示すと、「満足している」については 81.2%、「得たものがある」については 84.6%、「役に立った」については 54.4%であった。昨年と同じ設問への回答と比較すると、「満足している」については-1.2 ポイント、「得たものがある」については-7.2 ポイント、「役に立った」については-16.1 ポイントであった。昨年よりすべての設問でポイントが減少したのは、昨年がゼミの授業を加え教育学部生が多かったに比べ、今年は教職科目を対象とし、教育学部以外の学生の比率が増加したことも一因としてあげられる。

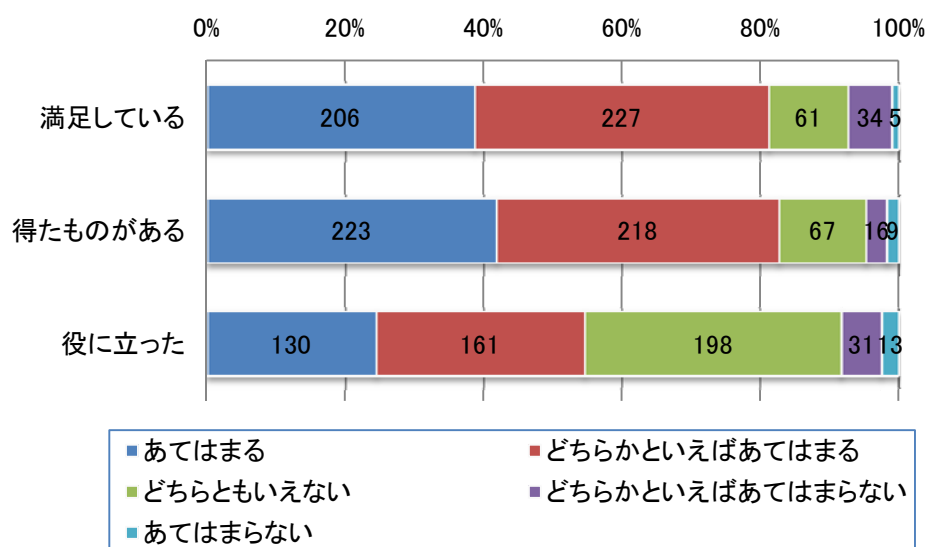


図 3 「役に立った」「得たものがある」「満足している」の比率 (全科目群)

■問 2 の分析結果

問 2 は、「この授業について」印象や感想について「あてはまるもの」を回答数に制限を加えずに選択させたものである (図 4 参照)。上位にあげられたものは「おもしろかった」

「考えさせられた」「考えが深まった」「視野がひらけた」といった肯定的回答で、順位としては昨年の回答と 2 位と 3 位が逆転している。また「熱意が伝わった」が昨年の 9 位から 5 位に上昇している。また「難しかった」が昨年の 8 位から 11 位に後退し、否定的回答のすべてが下位に並んだことが特徴的であった。しかし「難しかった」という回答が必ずしも否定的な意味とは限らず、「やりがいがあった」という気持ちを反映している可能性も昨年度までの分析で指摘されているので、その点を考慮すれば一概に判断はできない。

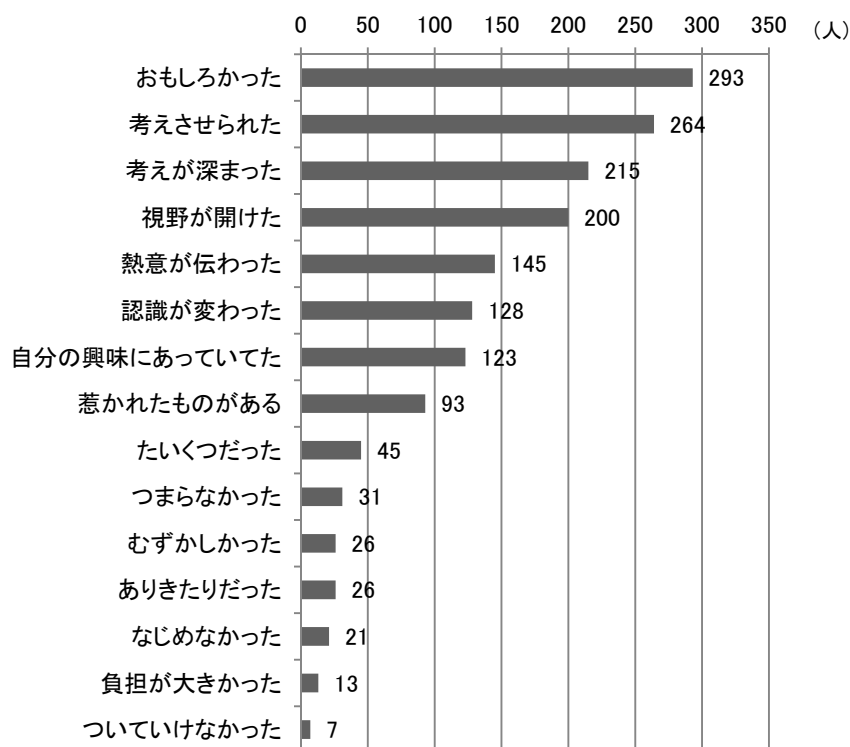


図 4 この授業にあてはまるもの【複数回答】(全科目群)

自由記述の分析

自由記述項目に記述された意見からは、講義授業からは「新しい知識の獲得」「これまでの教育観などが変わった」という視野の拡大の側面のコメントが多い、また「他の講義を理解するうえでの助けになる」や「自分の専門とは異なる分野の情報に触れることができる」といった意見は概論関係の授業としての基礎的性格の特徴によるものであろう。一方、教科教育法などの演習授業では、「実習授業への準備」や「指導案の書き方」など実践的内容の有用性が当然のことながら評価されている。特に「子どもの意欲」や「自分自身の学び」など、具体的な教科教育を越えた、社会生活への応用や自己形成への示唆に至る幅広い効用についての記述が見られた。

■問 3 の分析結果

問 3 は、「この授業について『最も期待すること』、『次に期待すること』」を尋ねたものである。「最も期待すること」としては「知識や理解を深められる」「実践力を身につけら

れる」「自分の問題意識を磨ける」の順に多く、続いて「多面的な考察ができる」ということで、教職科目としての期待に沿ったものであったと言える。昨年の回答と比べてもほぼ同じ傾向であるが、2番目の「実践力」が昨年までは「必要な方法論」を身につけるとなっていたので直接の比較はできない。「次に期待すること」としては「多面的な考察ができる」が最も多い回答であったが、これは昨年、一昨年と同じ傾向であった。

表 2 この授業に期待すること（全科目群）

3. この授業に期待すること	最も	次に
a. 知識や理解を深められる	214	103
b. 実践力を身につけられる	137	72
c. 自分の問題意識を磨ける	75	91
d. 主要な論点や最新動向に触れられる	43	92
e. 多面的な考察ができる	52	149
f. 自分の問題意識を検討できる	8	23
g. その他	4	3
総計	533	533

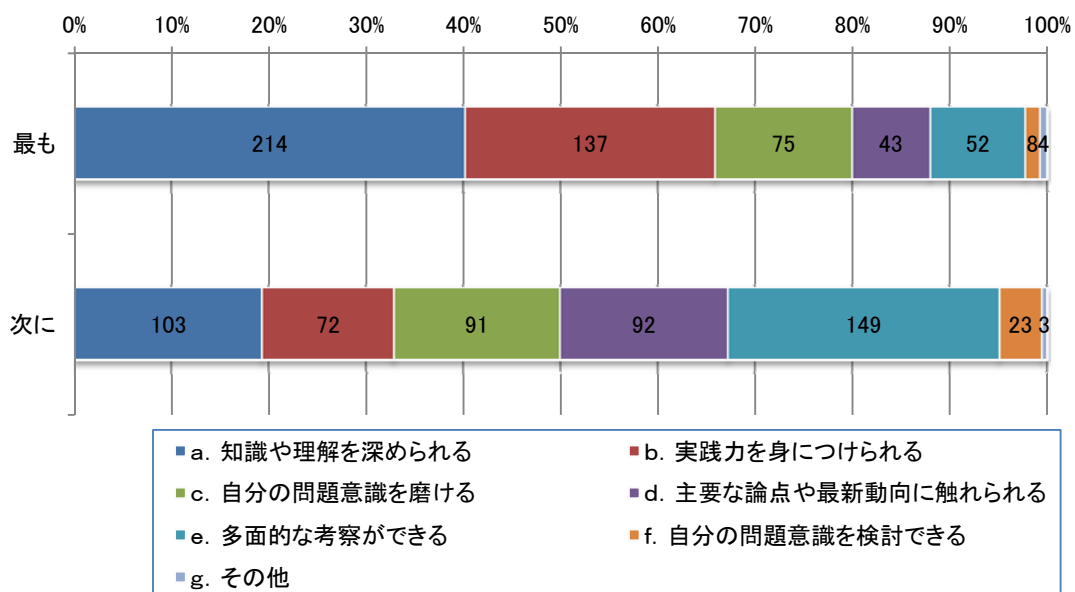


図 5 この授業に期待すること（全科目群）

■問 4 の分析結果

問 4 は「問 3 で選んだことからの達成度」を尋ねたものである（図 6 参照）。「達成できている」および「まあまあ達成できている」と回答した学生は 82.9%であり、昨年度の 82.0%、一昨年度の 79.4%とほぼ同じく高い達成度の認識を示している。

自由記述の分析

達成できていると回答している場合の背景としては、全般的に教員の熱意、広い知識、丁寧な説明、など教員の資質に関する高い評価が見られた。また毎回のレジメやビデオの使用などが理解を助け、また授業にメリハリを添えている様子が見られた。

演習系の授業では、「実験の使い方」「考えさせることの重要性」が明確になった。質疑応答での発話変化があった。また「具体的事例にそくした解説で、実際の問題点がわかりやすい」といったコメントもあった。

達成できていないという回答の背景としては、講義授業は大人数の教室もあり、授業環境や板書の問題があげられる。また「あまり専門的に深くない」や「表面的な話に終わっている」「(知識の) 生かし方がわからない」などの意見は概論科目群の授業としての限界でもあるが、検討の余地はあり得る。一方、演習系授業で達成できていないという回答としては、「模擬授業には全員が参加できない」、「人数制限」という不満のほか、「(モデルが) 高度なので自分ではできそうもない」「自己の興味と離れている」といった、概論科目群の授業とは逆に、実践的で絞られた目的の授業として、すべての学生へのカバーが難しいことを示している。

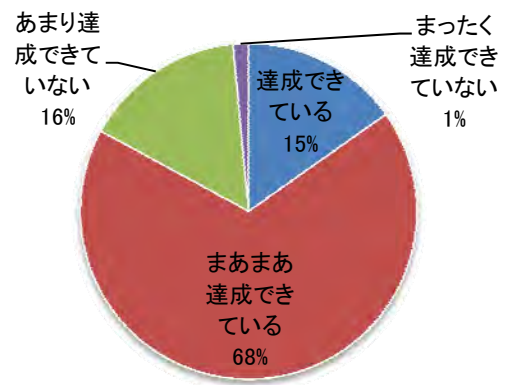


図 6 問3の期待の達成度 (全員)

■問5の分析結果

問5では、授業に対して「こころがけていること」を3つまで答えさせるものである。回答の多い順では「欠かさず出席」「問題意識と照らし合わせて授業理解」「集中して授業を聴く」「能動的に授業に臨む」「授業以外に自主的に勉強」と続き、この順番はここ4年間で全く変わっていない (図7参照)。

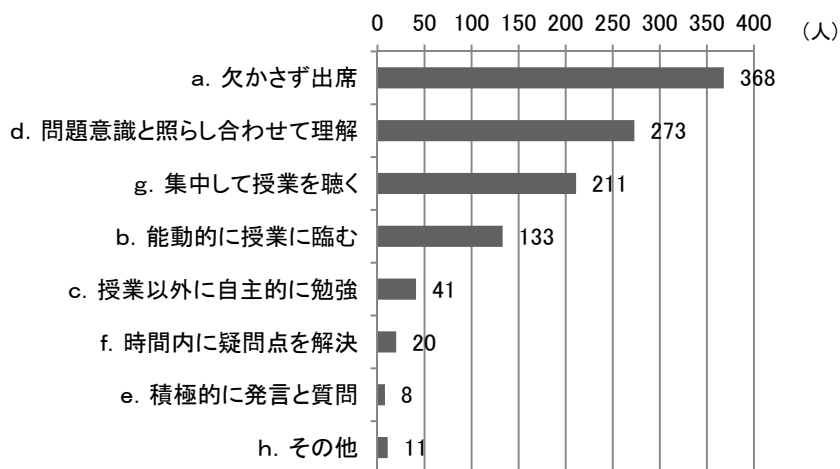


図 7 こころがけていること【三つまで複数回答】(全科目群)

■問 6（問 5 の自由記述）の分析結果

問 6 では問 5 で「授業で心掛けていること」に対して、「工夫・改善したほうが良いこと」について自由記述で聞いた。その結果、講義系の授業では、「出席を取る」や「宿題を出す」などの手続き的なものや、「現場で役立つ内容を多く教えてほしい」や「毎回コメントを書かせて考える時間を作る」、「ビデオ上映の前後での学生の意識の変化を調べる」、「参考文献をじっくり読む時間を作る」「他の学生のコメントを知らせる」「提出物へのレスポンスがほしい」などの提案が見られた。演習系授業では、授業への改善意見は少なかったが、「途中に休憩がほしい」「学生に意見を求める機会を増やす」などの要望が見られた。

■問 7 の分析結果

教員として必要とされる12の資質・能力について、現行の教職教育科目において、学生はどの程度認識しているかについて質問した。資質・能力の内容については§1.2で述べたように、教育実習「履修カルテ」に採用されている、1.使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項（項目a～cに該当）、2.社会性や対人関係能力に関する事項(項目d～fに該当)、3.生徒理解に関する事項(項目g～iに該当)、4.教科等の指導力に関する事項(項目j～lに該当)から12項目をすべて設問化した。

以上の12項目の教員に必要とされる資質・能力について、この授業を通じて認識できたかどうかを尋ねた。それに対する回答は、項目によって大きな差が出た（図 8 参照）。

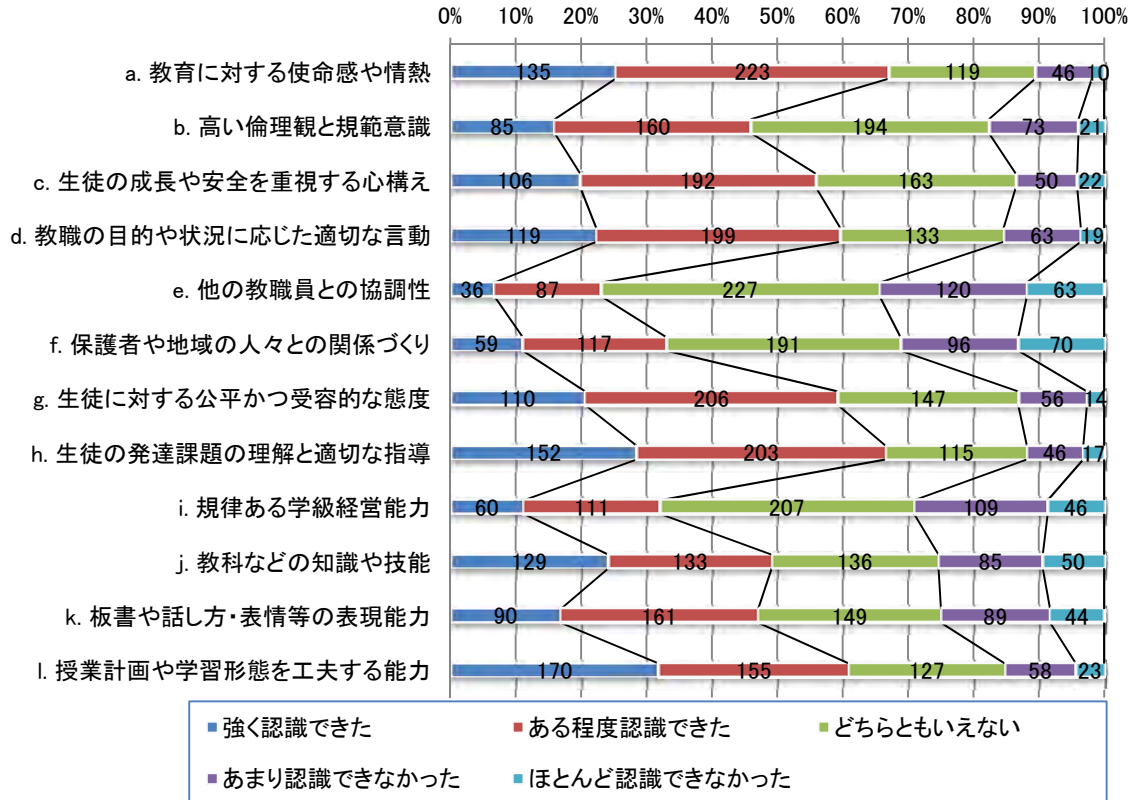


図 8 教師として必要とされる資質・能力についての認識（全科目群）

各項目への回答のうち「強く認識できた」と「ある程度認識できた」ものを合わせた比率は、「a.教師に対する使命感や情熱」(67.1%)と「h.生徒の発達課題の理解とそれに基づく適切な指導」(66.6%)で最も多く、続いて、「l.授業計画や学習形態を工夫する能力」(61.0%)、「d.教職の目的や状況に応じた適切な言動」(59.6%)、「g.生徒に対する公平かつ受容的な態度」(59.3%)が高く約6割程度の学生が認識していた。

一方、学生の認識が最も低かったのは、「i. 規律ある学級経営能力」(32.1%)「e. 他の教職員との協調性」(23.0%)、「f. 保護者や地域の人々との関係づくり」(33.0%)などであった。この結果を考察すると、大学授業という非現場において、理念的・認知的な項目については学生の認識は比較的高かったが、具体的な生徒や他の教員、地域などの存在を想定して項目については、目の前に存在しないだけに認識度は低かったといえる。

自由記述の分析

問 7(2)の自由記述では、上記以外で、この授業をとおして得られたと思う教師にとって重要な資質・能力について尋ねた。その回答を大まかにまとめると次のようになる。実際には選択肢にあった資質や能力を繰り返しているものは省略した。

① 精神性・熱意・誠実さ

「真摯に生徒と向き合う」、「教えること、生徒に対する誠実さ、真摯さ」、「真摯さ」、「生徒に対する熱意」、「「本気」で取り組めるかどうか」、「元気」、「向上心」

② 知識・専門性・経験

「教育理論への造詣」、「経験と知識の融合した授業を行うこと」、「教育を研究しようとする姿勢」、「論理的思考能力」、「高い知性とユーモア」、「教養と批判的思考」、「論理的思考能力・哲学」、「専門性」、「不断の研究」、「問題解決能力」

③ 人間性・寛容性・広い視野

「人間性」、「あらゆる価値観を受け入れる寛容な態度」、「子供を惹きつける人間性」、「異文化理解」、「多角的に考え、解決する能力」、「視点の広さ・考えの深さ・情報提供力」、「人間性の幅と深さ」、「上手な話し方と、口だけではなく、その背後にある地に足ついた人間性」

④ 対生徒理解力・感受性・洞察力

「問題を深く考え、本質を理解する力」、「生徒の問題意識を喚起し、それを発展させる能力」、「生徒の成長を第一に考えられる気構え」、「生徒の素直な感じ方を尊重できること」、「生徒としっかり向き合おうとすること、差別ではなく生徒1人1人に合った対応ができること」、「生徒の考えを注意深く観察でき、それらを認められること」、「生徒ひとりひとりのことを考えること」、「話を聞こうとする姿勢」、「生徒の現状をよく認識・理解して対応する能力」、「生徒との距離のとり方」、「子ども1人1人のことを考えること」、「ありのままの子どもを見て、関心をもつこと。幻想を抱かず、現実を見ること」、「しっかり考えようとする。生徒の立場で考えること」、「生徒に対する観察力」、「生徒への深い理解」、「生徒の気分を感じ取る能力」

⑤ 授業のうまさ・惹きつける力・説明力

「授業において、生徒の興味を引きつける力」、「生徒を飽きさせない授業の構築」、
「受講者の興味をひきつける能力」、「生徒を授業に集中させられる魅力をもった人。
またそのような努力を行うこと」、「物事をはっきり述べる力」、「授業構成能力」

⑥ 柔軟性・忍耐力・耐久力

「ストレス・コントロール」、「理論だけではなく、実際の状況において、生徒のことを
考えつつ、臨機応変に対応すること」、「授業運営における柔軟さ」、「目標達成のため
に臨機応変に工夫する力」、「待つ忍耐力」、「諦めないこと」、「ストレス耐性（保護
者からのクレーム対応、自分の間違い、失敗を気にしすぎないこと）」

⑦ 冷静さ・バランス感覚

「主観的にならず物事を冷静に判断する」、「バランス感覚」、「問題をあせらず解決す
る。まじめさ」

⑧ 社会性・状況把握力・国際性

「現在の社会情勢を把握する能力」、「現代社会に対しての客観的考察能力」、「新制度
に関する知識・理解」、「インターナショナルに考え、参考にできるものは率先して取
り入れる能力」、「現代社会の課題を生徒の発達と結びつけて考えようとする姿勢」、
「日本の教育の特徴を考え、その強みと弱みを分かった上で、強みをより生かすこと
と弱みをフォローしていくことでより良い教育を作っていくこと」、「教育の現在置か
れている立場を認識すること」

また、そのほかに、「常識のあること」、「リーダーシップ」、「言葉づかい」、「教員採用試
験に通る能力」などのコメントがあった。

□ 3. 概論科目群に関する「学生による授業アンケート」の結果と分析

§ 3.1 回答者の属性

アンケートを実施した授業のうちで概論科目群に該当するのは、A（教育課程論）、B（比較教育学概論Ⅱ）、C（民族と教育）、D（教育学概論Ⅱ）、G（教育政策概論Ⅱ）、J（教育社会学概論Ⅱ）である。のべ363の回答を得た。

回答者の所属学部・研究科を内訳でみると、所属部局はほぼ全学部にわたり、教育学部がのべ110人(30,3%)、総合人間学部がのべ21人(5,8%)、文学部がのべ80人(22,0%)、法学部が1人(0,3%)、経済学部がのべ5人(1,4%)、理学部がのべ66人(18,2%)、医学部がのべ3人(0,8%)、工学部がのべ26人(7,2%)、農学部がのべ24人(6,6%)、その他がのべ27人(7,4%)であった。調査全体の傾向と比較すると、教育学部に所属する学生の割合が大きい。概論科目群の授業を専門科目として履修している教育学部生がいるためであると考えられる。

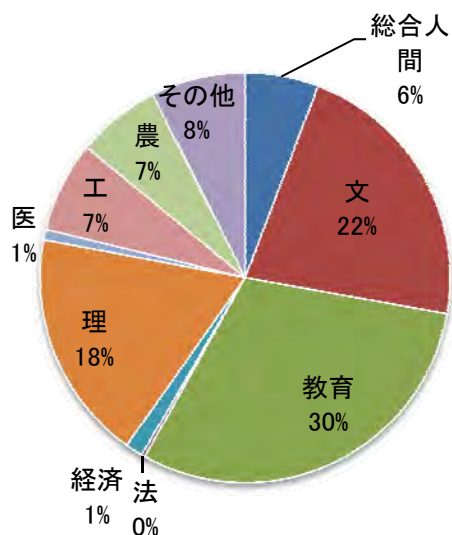


図 9 回答者の所属（概論科目群）

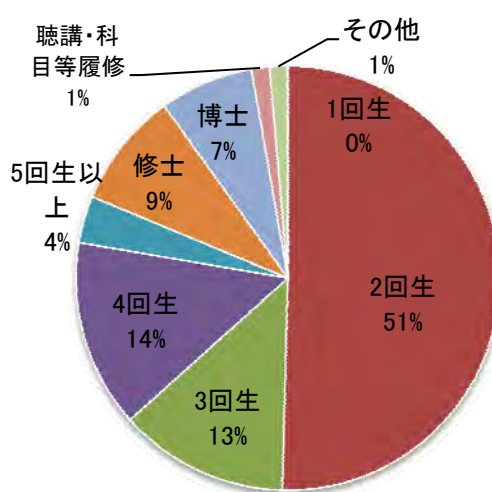


図 10 回答者の学年（概論科目群）

回答者の学年については、2回生が183(50,4%)、3回生が47(12,9%)、4回生が52(14,3%)、5回生以上が13(3,6%)であった。大学院生の受講に関していえば、修士課程が32(8,8%)、博士課程が26(7,2%)であった。

性別では男性が237人で65,3%を占めた。女性は125で34,4%であった(記述無し1名)。男性の履修生がほぼ3分の1を占めた。教育学部生の入試の文系・理系の別では、理系入試経験者はのべ19人で、全体の17,3%であった。

当該の授業を教職単位として受講していたのはのべ243人(教職科目および専門科目の双方を目的とした受講生を除く)67,0%であり、これらを専門科目として受講していたのはのべ50人(13,8%)であった。それとは別に、教職科目および専門科目の双方を目的として受講したのは、のべ46人(12,8%)であった。

§ 3.2 アンケート全体の結果の分析

■問1の分析結果

問1では、「この授業について、満足している／得たものがある／役に立った」という点について、あてはまるか、あてはまらないかについて尋ねた。「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」と回答したものの割合を示すと、「満足している」については289(80,0%)、「得たものがある」については292(80,4%)、「役に立った」については184(50,7%)であった。全体の傾向と比較すると、「役に立った」に対する肯定的な回答が少ないことがわかる。その一因としては、教職に関する役立ちのイメージが教育実践に携わる際の有用性と結びついており、概論科目群においてはそのような役立ちのイメージに呼応する内容を盛り込むことが困難であったことが考えられる。「満足している」および「得たものがある」については概ね肯定的な回答を得られていることから、役立ちについての回答結果は、授業の充実度が不十分であったということだけをただちに意味しているわけではない。

自由記述からは、授業に対する満足度や役立ち度に関する具体的な理由を知ることができる。「新しい知識が得られた」、「専門の基礎がわかった」、「日本と世界との違いがわかった」、「学校像、教育像の形成をするために参考になる」、「歴史の変遷を知ることができた」といった記述からは、教育に関する知識、視点、考え方の習得などが満足度とかかわって評価されたことがわかる。また、「授業の構成に工夫がなされていた」、「何に焦点が当てられているかが明確だった」、「提示されたビデオや文献などが非常に刺激的だった」、「他の受講生の意見にもふれることができ視野が広がった」などの記述にみられるように、講義形式を採る概論科目群の授業において担当者が授業方法に関して工夫していること、また、そのことが受講生の満足度に関する肯定的な評価と結びついていると考えられる。

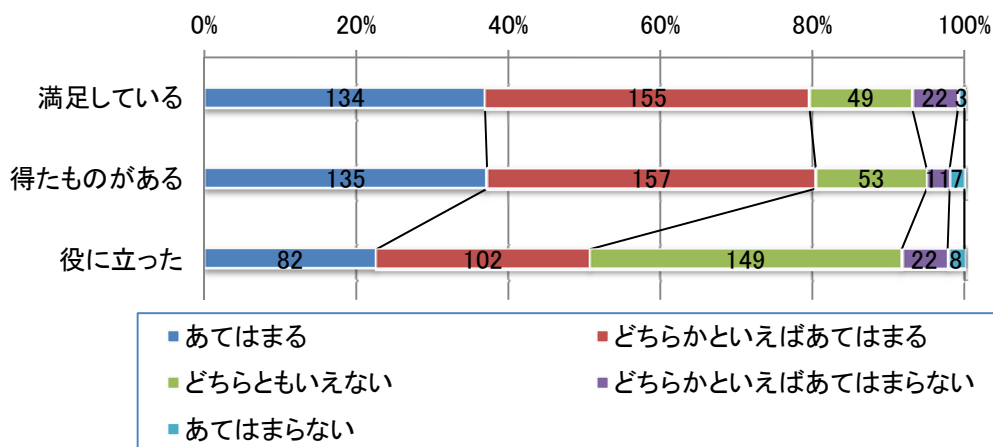


図 11 「役に立った」「得たものがある」「満足している」の比率（概論科目群）

■問2の分析結果

問2は、「この授業について」抱いた印象や感想として「あてはまるもの」を回答数に制限を加えずに選択させたものである。上位にあげられたのは、「おもしろかった」「考えさせられた」「視野がひらけた」「考えが深まった」「熱意が伝わった」などで、若干の順位の

相違は見受けられるものの、アンケート全体の結果と同様に、肯定的な回答が上位に並んだ。概論科目群では、とくに「おもしろかった」が第1位となった（教科教育科目群、生徒指導科目群では、ともに第2位）。問1（2）における自由記述と結びつけていえば、一般に概論科目群の授業は受講者にとって冗長に感じられることが多いという声が聞かれるなかで、こうした結果が出たことは、授業に受講生たちを引きつける努力を授業担当者が払っていることを裏打ちしていると考えられる。否定的回答のすべてが下位に並んだことも、アンケート全体の結果と同様の傾向であった。

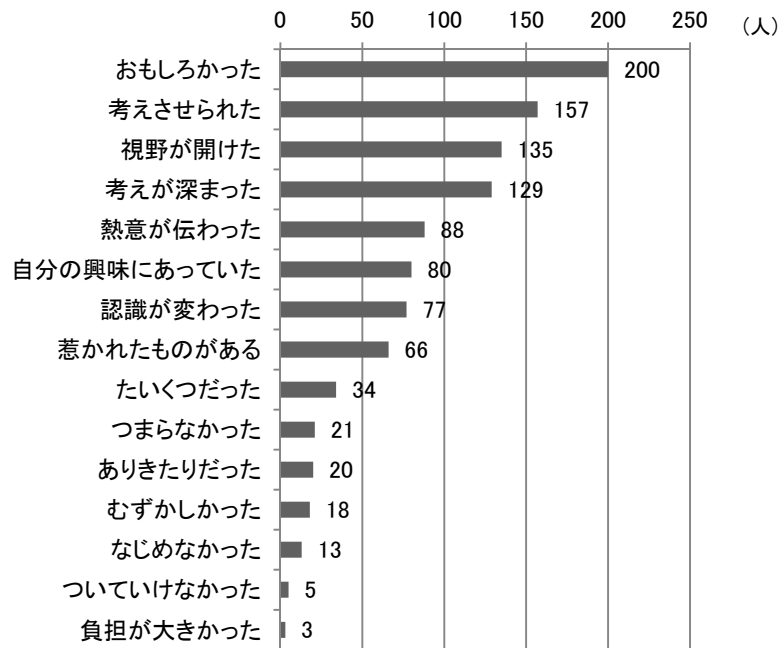


図 12 この授業にあてはまるもの【複数回答】(概論科目群)

■問3の分析結果

問3は、「この授業について『最も期待すること』、『次に期待すること』」を尋ねたものである（表3および図13参照）。「最も期待すること」としては「知識や理解を深められる」「自分の問題意識を磨ける」「実践力を身につけられる」の順に多く、「多面的な考察ができる」がそれに続いた。教科教育法科目群および生徒指導科目群の授業に比べると、概論科目群の特徴としてあげられるのは、「知識や理解を深められる」ことに対する期待が非常に大きく、「実践力を身につけられる」ことへの期待が相対的に小さいことであろう。受講生において、「実践力」ということでおそらくイメージされている教壇に立ったときに有効な知識と技能は、概論科目群とそれほど結びつけて考えられていないことがわかる。それとは逆に、「多面的な考察ができる」ことに対する期待度は、概論科目群では相対的に高かった。以上のような問3の回答もまた、知識や視野の拡張を評価している問1（2）の自由記述と呼応しているものと考えられる。

表 3 この授業に期待すること（概論科目群）

3. この授業に期待すること	最も	次に
a. 知識や理解を深められる	164	65
b. 実践力を身につけられる	53	34
c. 自分の問題意識を磨ける	57	61
d. 主要な論点や最新動向に触れられる	34	74
e. 多面的な考察ができる	43	108
f. 自分の問題意識を検討できる	8	18
g. その他	4	3

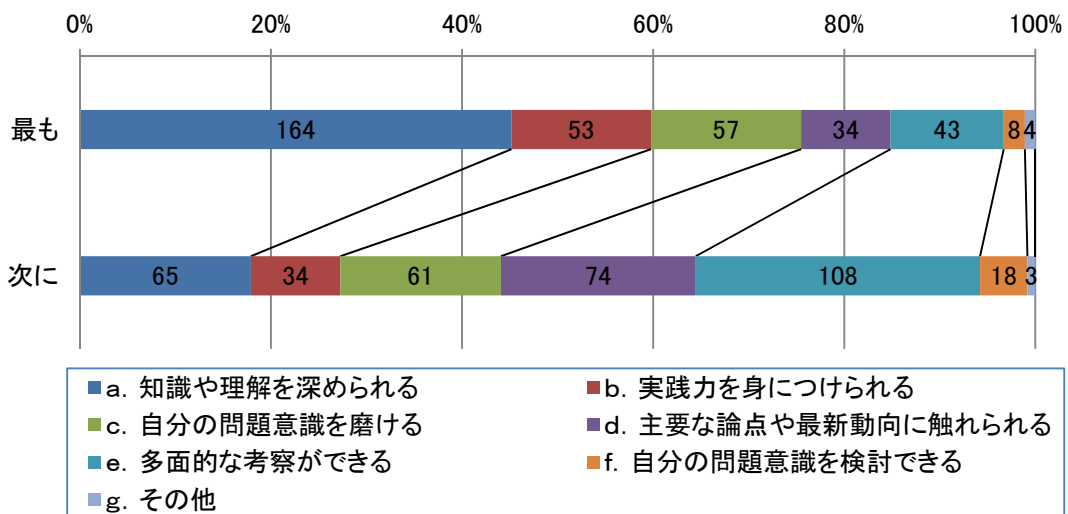


図 13 この授業に期待すること（概論科目群）

■問 4 の分析結果

問 4 は「問 3 で選んだことからの達成度」を尋ねたものである。「達成できている」および「まあまあ達成できている」と回答した学生は 82,6%であり、アンケート全体の傾向とほぼ同一である。

自由記述の分析

自由記述欄において期待が満たされたことの理由を探ってみると、教科書・レジュメ・資料の充実、視聴覚教材の活用、概論部分と専門部分との効果的な連携、授業の綿密な計画性、多様で明確なテーマ設定などを

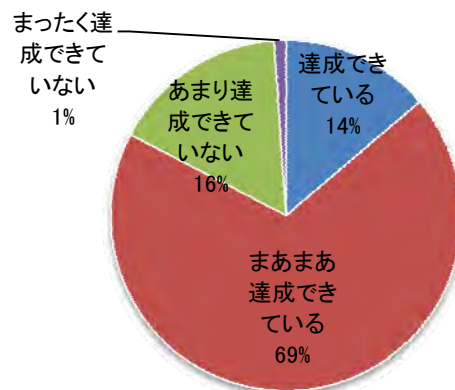


図 14 問 3 で選んだことからの達成度（概論科目群）

あげることができる。具体的な記述の例示としては、「資料集や教科書を利用して多様な論点が提示された」「レジュメが整理されていて、わかりやすかった」「話題が明確で、自己学習も容易になった」「板書がみやすかった」「視聴覚教材によって問題意識が喚起された」「毎回の感想文執筆により、自分の見解を表現できた」「多面的な考察というポイントについて授業担当者本人が工夫していた」「具体例が示されて、理解が促進された」などをあげることができる。

その一方で、達成できていないという回答の理由としては、「自己学習の欠如」、「出席不足」といった受講生の自己反省にかかわるものと、授業の改善を求めるものがみられた。後者については、たとえば、「深い内容に踏み込んでいない」、「資料の量が多すぎる」「高度で難しすぎる」、「授業担当者の関心に基づいて授業が構成されている」、「もっと教育の現実に落とし込んだ話題を盛り込んでほしかった」といった意見が寄せられた。概論科目群の授業では受講生の人数が多い場合も多く、そのような規模の制約も顧慮しなければならないが、受講生の意見に耳を傾けて授業改善を検討することは重要であろう。授業ごとに記述内容は異なっており、各授業担当者に対するアンケート結果のフィードバックが求められる。

■問5の分析結果

問5では、授業に対して「こころがけていること」を3つまで答えさせるものである。回答の多い順から並べると、「欠かさず出席」「問題意識と照らし合わせて授業理解」「集中して授業を聞く」「能動的に授業に臨む」「授業以外に自主的に勉強」であった。この順位は、アンケート全体の結果と完全に一致している。一般に、概論科目群の授業において授業担当者が工夫を必要とするのは、とりわけ「積極的に発言と質問」をするように受講生を促すことである。問1（2）などによるアンケートの結果からは、すでにこのことに関する授業担当者の努力が認められるが、今後も引き続き改善が求められるべき点であろう。

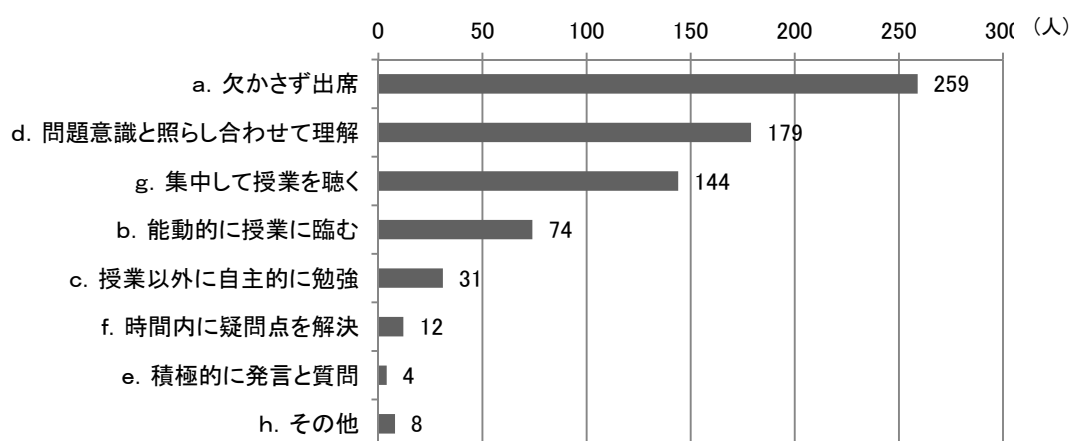


図 15 こころがけていること【三つまで複数回答】(概論科目群)

■問 6（問 5 の自由記述）の分析結果

問 6 では問 5 で「授業で心掛けていること」に対して、「工夫・改善したほうが良いこと」について自由記述で聞いた。教育方法論上の工夫に関する提案としては、「板書をわかりやすくしてほしい」「授業内容の体系性を高めてほしい」「質問の時間を挟んでほしい」「視聴覚教材の視聴が長いので、適度にしてほしい」「他の受講生との意見交換などの時間を設けてはどうか」「現場で役立つ内容を多く教えてほしい」「ビデオ上映の前後での学生の意識の変化を調べる」「提出物へのレスポンスがほしい」といった記述がみられた。また、「出席を取る」や「宿題を出す」といった手続きの提案もあった。また、「教室が狭い」「座席数が確保されていない」「映像が見にくいので階段式の教室が望ましい」など、教室環境にかかわる要望も出された。こうした記述は、大講義室を用いる概論科目群の授業に関してみられた。授業ごとに要望や提案は異なっており、ここでも、各授業担当者に対するアンケート結果のフィードバックが求められる。

■問 7 の分析結果

教員として必要とされる12の資質・能力について、現行の教職教育科目において、学生はどの程度認識しているかについて質問した（図 16参照）。

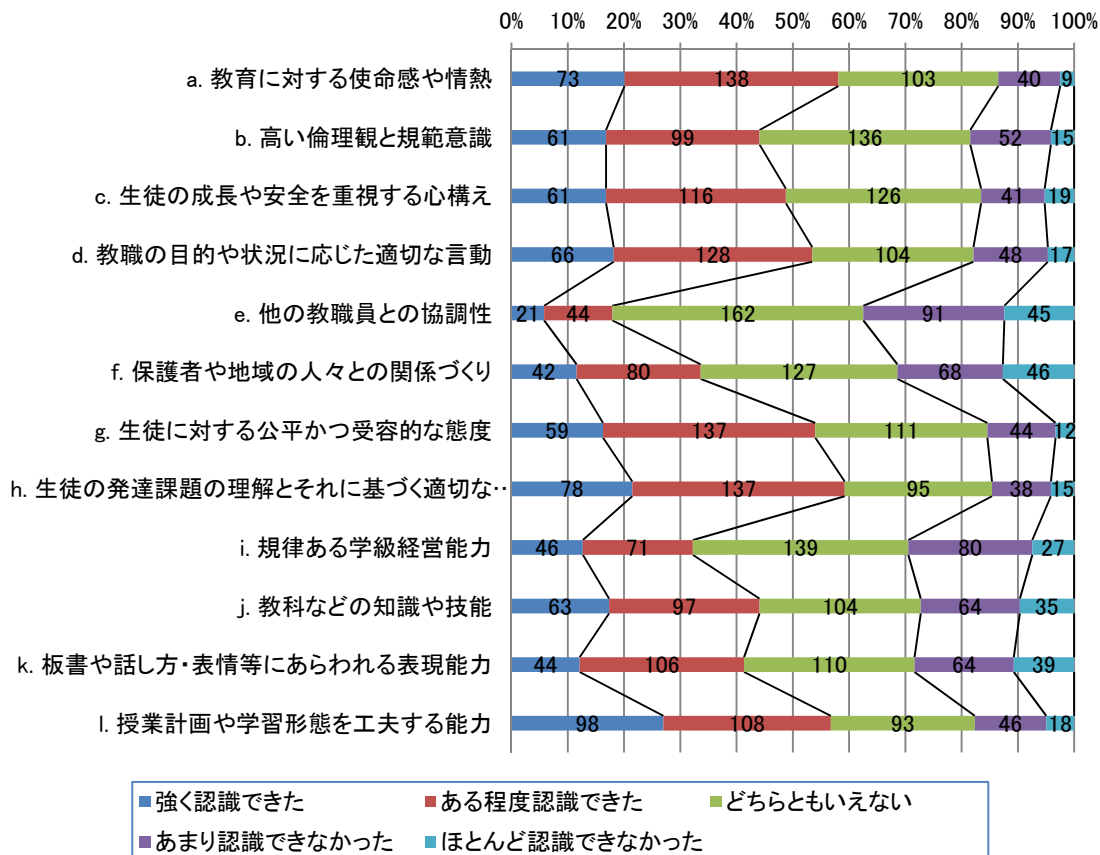


図 16 教師として必要とされる資質・能力についての認識（概論科目群）

12項目の教員に必要とされる資質・能力について、この授業を通じて認識できたかどうかを尋ねた結果、項目によって回答に大きな差が出た。各項目への回答のうち「強く認識できた」と「ある程度認識できた」ものを合わせた比率は、「h.生徒の発達課題の理解とそれに基づく適切な指導」(59,2%)と「a.教師に対する使命感や情熱」(58,1%)、「l.授業計画や学習形態を工夫する能力」(56,7%)などで大きく、続いて、「g.生徒に対する公平かつ受容的な態度」(54,0%)、「d.教職の目的や状況に応じた適切な言動」(53,4%)で50パーセント以上となった。学生の認識が最も低かったのは、「e.他の教職員との協調性」(18,0%)で、「f.保護者や地域の人々との関係づくり」(33,6%)、「i.規律ある学級経営能力」(32,2%)などがそれに続いた。今回のアンケート全体の傾向として、大学授業という非現場において理念的・認知的な項目について学生の認識は比較的高く、具体的な生徒や他の教員、地域などの存在を想定した項目について認識度は低かった、ということが指摘されているが、このことは概論科目群についてもそのまま当てはまる。

自由記述の分析

問 7(2)の自由記述では、上記以外で、この授業をとおして得られたと思う教師にとって重要な資質・能力について尋ねた。アンケート全体の結果で示されたカテゴリーに基づいて、その回答を大まかにまとめると次のようになる（選択肢にあった資質や能力を繰り返しているものは省略）。

⑨ 精神性・熱意・誠実さ

「真摯に生徒と向き合う」、「教えること、生徒に対する誠実さ、真摯さ」、「本気」で取り組めるかどうか」

⑩ 知識・専門性・経験

「教育理論への造詣」、「知識としての教育の歴史」、「教育を研究しようとする姿勢」、「カリキュラムに関する知識」、「高い知性とユーモア」、「教養と批判的思考」

⑪ 人間性・寛容性・広い視野

「人間性の幅と深さ」、「あらゆる価値観を受け入れる寛容な態度」、「子供を惹きつける人間性」、「教養と批判的思考」、「異文化理解」、「多角的に考え、解決する能力」

⑫ 対生徒理解力・感受性・洞察力

「問題を深く考え、本質を理解する力」、「生徒の問題意識を喚起し、それを発展させる能力」、「生徒の成長を第一に考えられる気構え」、「生徒の素直な感じ方を尊重できること」、「生徒とのコミュニケーション能力」、「生徒ひとりひとりのことを考えること」

⑬ 授業のうまさ・惹きつける力・説明力

「教科の系統性やその歴史（に対する理解）」、「授業において、生徒の興味を引きつける力」、「生徒を飽きさせない授業の構築」、「説明する能力」、「上手な話し方」、「テンポのよさ」、「生徒を授業に集中させられる魅力をもった人。またそのような努力を行うこと」

⑭ 柔軟性・忍耐力・耐久力

「ストレス・コントロール」、「目標達成のために臨機応変に工夫する力」、「待つ忍耐力」、「諦めないこと」

⑮ 冷静さ・バランス感覚

「主観的にならず物事を冷静に判断する」

⑯ 社会性・状況把握力・国際性

「現在の社会情勢を把握する能力」、「現代社会に対しての客観的考察能力」、「新制度に関する知識・理解」、「インターナショナルに考え、参考にできるものは率先して取り入れる能力」

そのほかに、「常識があること」、「リーダーシップ」などの回答もあった。

□ 4. 教科教育法科目群に関する「学生による授業アンケート」の結果と分析

教科教育法に関連する授業は、E（理科教育法Ⅱ）、H（社会科教育法Ⅱ）、I（国語科教育法Ⅱ）、K（数学科教育法Ⅱ）の4科目である。このうち、社会科教育法Ⅱからは回答が得られなかったため、残りの3科目について分析をおこなう。のべ94の回答を得た。

§ 4.1 回答者の属性

回答者の所属学部・研究科を内訳でみると、所属部局は図17のとおりである。理学部が36%（34人）ともっとも多くなっているが、これは理科教育法、数学教育法の受講者である。一方、国語科教育法の受講者の多くは、文学部所属である。回答者の学年を図18に示した。それによると、半数以上が2回生である。

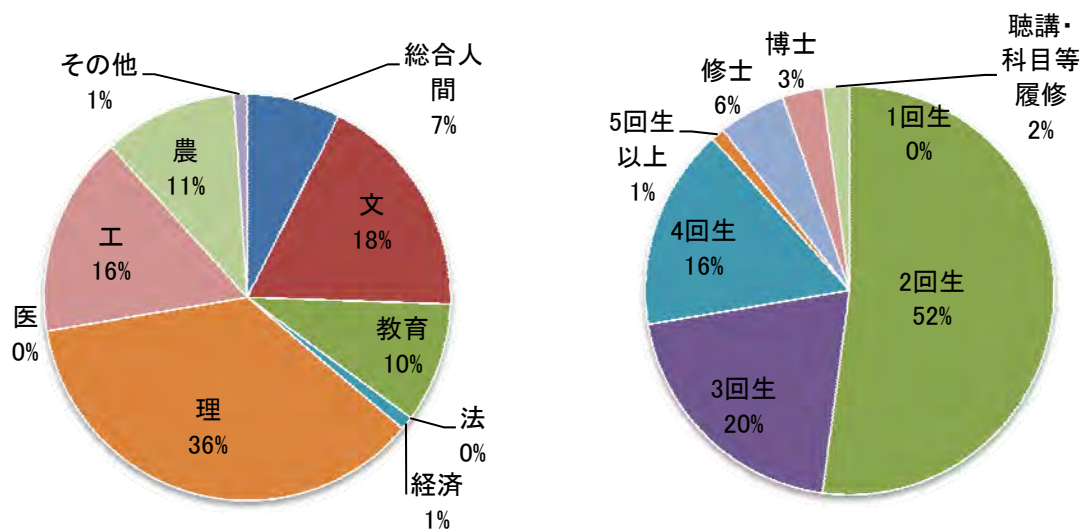


図17 回答者の所属（教科教育法科目群）

図18 回答者の学年（教科教育法科目群）

回答者の性別は、男性が67人(71.3%)、女性が27人(28.7%)である。また、当該科目を教職授業として受講していたのは、90人(95.7%)、教職・専門の両方として受講していたのは、3人(3.2%)、記述なしが1人であった。科目の性格上、教職科目として受講するものであるため、教職・専門の両方という回答は、回答者のミスだと考えられる。

§ 4.2 アンケート全体の結果の分析

■問1の分析結果

「この授業について、満足している／得たものがある／役に立った」かを尋ねるこの設問では、図19に示すように「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」を併せた肯定的回答が、「役に立った」で約65%、「得たものがある」で90%、「満足している」で82%と、いずれも高い比率であった。これらは概論科目群と比較すると、「役に立った」「得たものがある」という有用度に関わる項目で20%程度多くなっている。各教科の教育法と直

接に結びつく科目群として、学生に「役に立ち」「得たものがある」と評価されることは、この群の科目の目的にかなったものであるといえる。

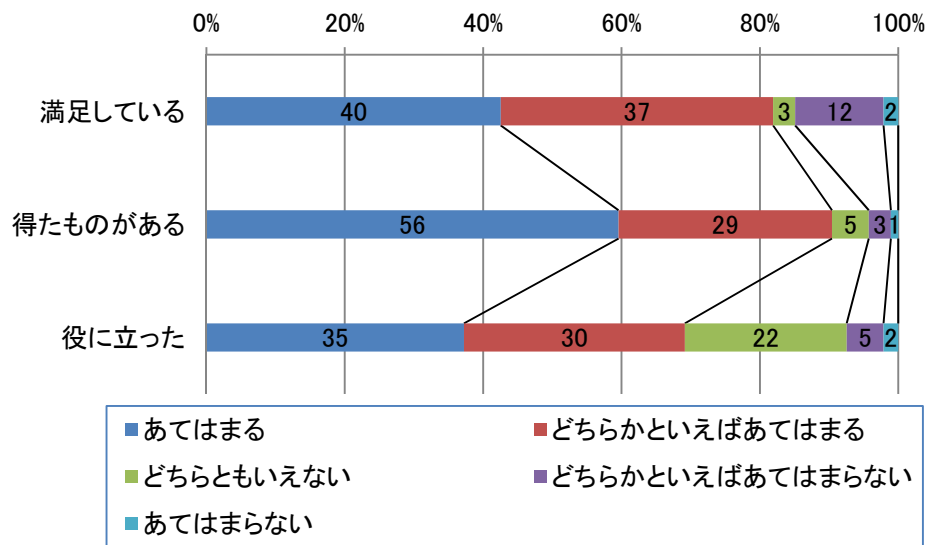


図 19 教科教育法科目群に対する全体的な評価（教科教育法科目群）

こうした肯定的評価を形成する要因を知るため自由記述を参照すると、学生のプラクティカルな動機付けが高く、評価もそれに関連しておこなわれていることがわかる。たとえば、「模擬授業をおこなうことで、授業計画や指導案の書き方が学べる」「模擬授業をおこない、その後にディスカッションがある」という授業の形態に関連して、「(習ったことが)塾で教えるのに役立った」「(用意された教材を学ぶことが)自身の能力の向上に役立った」といった内容の記述が多かった。具体的には、「指導における具体的ポイント」「生徒への発問の仕方」「生徒側の目線の理解」などの内容が含まれていた。

■問2の分析結果

問2は、当該授業の印象や感想について「あてはまるもの」を複数選択するものである。その結果を選択された率の高かったものから並べたのが図20である。上位には肯定的評価を表す言葉が並ぶ。これまでの授業評価や今回の他の科目群の肯定的評価と同様の項目が並んでいるが、「考えさせられた」を94人中62人(66%)が選択しており、もっとも上位に来ているのが特徴である。第2位は、概論科目では1位であった「おもしろかった」であり、94人中52人(55%)が選択している。これは概論科目で363人中200人(55%)が選択したのと同様の比率である。これとほぼ同数で「考えが深まった」が選択されているが、これらを考え合わせると、教科教育法関連の科目では、「考えさせられ、考えが深まる」という性質が、概論科目よりも強いということになる。

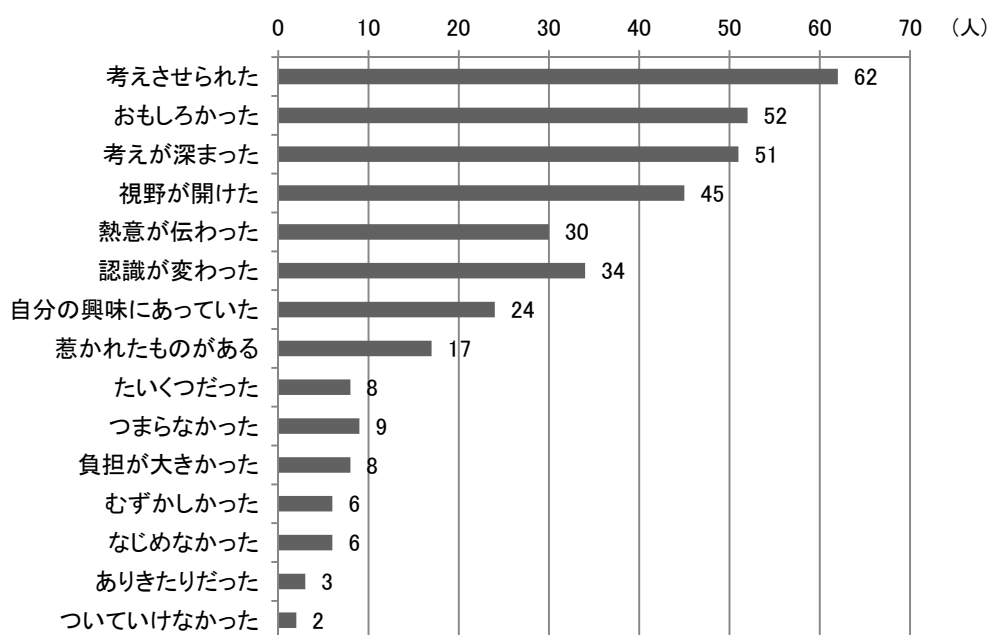


図 20 教科教育法科目群の印象・感想

■問3の分析結果

問3は、「この授業について『最も期待すること』、『次に期待すること』」を尋ねたものである。結果を表4および図21にまとめた。

「最も期待すること」は、「実践力を身につけられること」で60人(64%)が選択しており、他より圧倒的に多い。「次に期待すること」は、「多面的な考察ができる(25人)」「知識や理解を深められる(23人)」が続く。「最も」と「次に」の総計では、「実践力を身につけられる」が79人であり、「知識や理解を深められる」がそれに続く。これらを総合すると、教科教育法科目群の受講者は、教壇にたつための実践力を身につけ、それを支えるものとして知識を得、多面的考察ができるようになるということを期待していることがわかる。

表4 教科教育法科目群に期待すること

3. この授業に期待すること	最も	次に	総計
a. 知識や理解を深められる	19	23	42
b. 実践力を身につけられる	60	19	79
c. 自分の問題意識を磨ける	5	17	22
d. 主要な論点や最新動向に触れられる	5	6	11
e. 多面的な考察ができる	5	25	30
f. 自分の問題意識を検討できる	0	4	4
g. その他	0	0	0

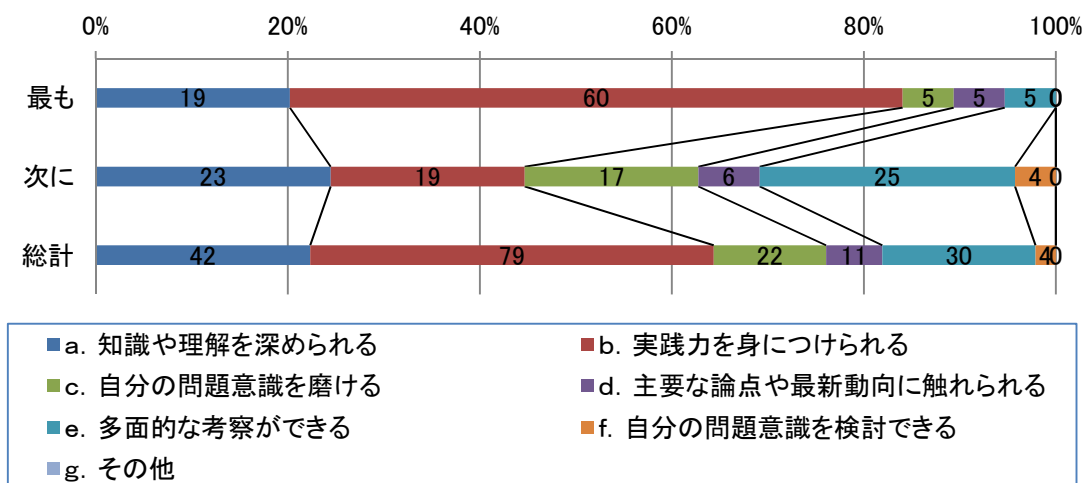


図 21 教科教育法科目群に期待すること

■問 4 の分析結果

問 4 は、問 3 で選んだ「期待したこと」の達成度を尋ねたものである。「達成できている」および「まあまあ達成できている」と回答した学生は合わせて 84% であり、今回のアンケート全体と同じ傾向である。(図 22 参照)

自由記述の分析

自由記述をもとに期待が達成できたことの原因を探してみると、「実際に模擬授業をおこない、その後ディスカッションがある」という授業の形態を理由として挙げているものが多いほか、「高度で豊かな内容。教育現場で使われている、実際の教材を用

いている」といった、授業の内容に関するものもあった。また、事例としては少数であるが、「達成できていない」と回答したものの理由は、「模擬授業がまわってこない」「もっと模擬授業をやらせてほしい」という、受講人数の多さによる制限に関するものが多かった。その解決法として「クラスを分けて複数開講にする」という意見も挙がっていた。授業の組み立てに言及したものとしては、「模擬授業のポイントをあらかじめ明らかにしてほしい」という意見があった。実際に教職につくことを強く意識した場合、実際に習ったことが果たして教育現場で実際に実践できるかどうか不安を表した記述が複数みられる。「習ったことを自分なりに実践に展開するという課題が残る」「理解したことが実際にできるか不安」

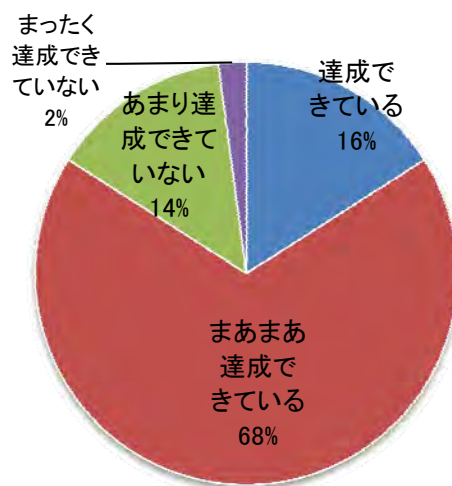


図 22 期待したことが達成できているか (教科教育法科目群)

というものである。それを達成するためにどうすればいいかを問われると、「教育実習に実践の課題をもちこすしかない」ということであった。教科教育法関連の科目は、学生が実践的で具体的なことを学べるという、学習の達成の実感が強い科目である。受講者にその有意義な機会が平等に与えられるように、制度面での努力が必要であろう。

■問5の分析結果

問5では、授業に対して「こころがけていること」を3つまで答えさせるものである。上位2つは、「欠かさず出席 61人（有効回答 94名中 63%）」「問題意識と照らし合わせて理解 53人（55%）」で、講義科目と同じである。第3位が「能動的に授業に臨む 39人（40%）」であり、講義科目では20%程度であったのに比して多くなっているのが特徴である。教科教育法は、学生の当面の具体的なニーズや問題意識から意味づけることができ、模擬授業等をおこなうなどの実践を取り入れていることの影響であると解釈できよう。

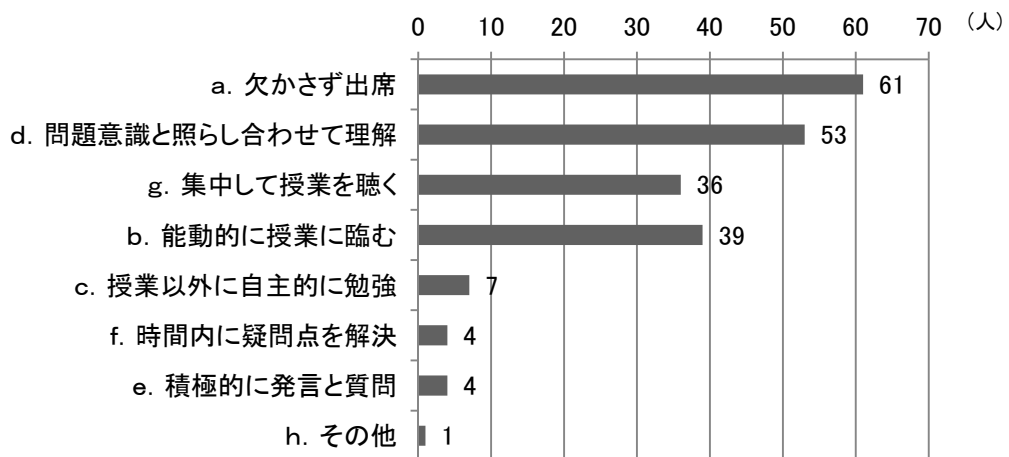


図 23 こころがけていること【三つまで】(教科教育法科目群)

■問6(問5の自由記述)の分析結果

問6では問5で「授業で心掛けていること」に対して、「工夫・改善したほうがいいこと」について自由記述で聞いた。「板書をしてくれるといい」「板書をもっとゆっくりしてほしい」という意見が複数あり、実践と結びつけながら、知識も得ていくことも望まれているようである。また、能動的に授業に望めるようにするために「席が固定制で後ろでは発言しにくい」「話のポイントがどこにあるのかをはっきりさせる」「もっと実践的な技術を教えてほしい」というものがあった。

■問7の分析結果

教師に必要なとされる12の資質・能力について、どの程度得ることができたか、あるいは必要性を認識・再認識できたかを問うたものである。結果を図24に示す。

それによれば、「j. 教科などの知識や技量」を獲得することができたとするものが、「強く認識できた」「ある程度認識できた」を含めたポジティブ評価は88%となっており、学生からの評価は、教科教育法の目的にかなったものとなっている。また、「l. 授業計画や学習形態を工夫する能力」も、88%のポジティブ評価を得ている。また、「強く認識できた」は少なくなるものの、「k. 板書や話し方・表情等にあらわれる表現能力」「h. 生徒の発達課題の理解とそれに基づく適切な指導」も、80%程度の受講生が、ポジティブ評価をおこなっている。いずれも、教科教育法の目的によくかなったものであり、目的の達成の度合いは高いと考えることができよう。

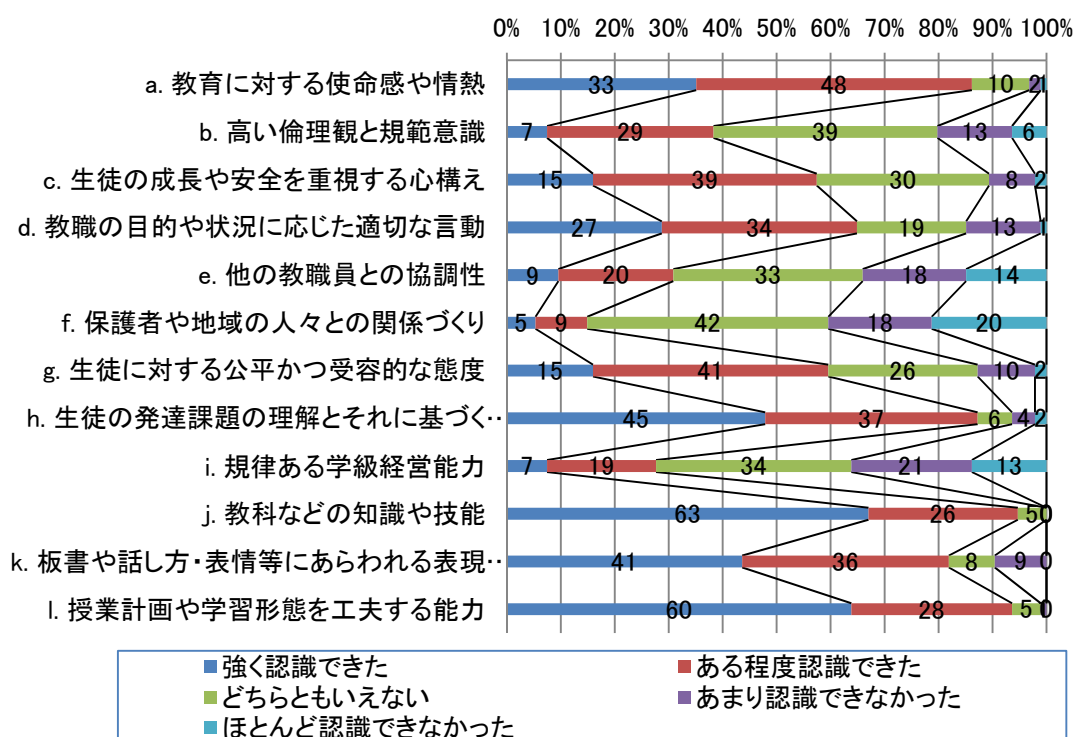


図 24 教師に必要とされる諸能力がどの程度、獲得・認識できたか（教科教育法科目群）

自由記述の分析

問 7(2)の自由記述では、問 6 で尋ねたこと以外で、この授業をとおして得られたと思う教師にとって重要な資質・能力について尋ねた。

自由記述に回答した者は半数程度であるが、それによると、「科学を愛する心」「授業以外でも、ふだんから授業づくりや生徒のことを考えておく姿勢」「言葉使い」「熱意とやる気」というごとく、授業担当者の姿勢そのものから学んでいると思われる感想がほとんどであった。また、「生徒の気分を感じ取る能力」「生徒に対する観察力」「生徒に対する熱意」「しっかり考えようとする。生徒の立場で考えること」といった、やはり授業者の姿勢と関連して、自らの生徒に対する態度等に関する学びや気づきが述べられているものが多かった。

□ 5. 生徒指導科目群に関する「学生による授業アンケート」の結果と分析

生徒指導に関連する授業は、L（教育相談）、M（特別活動の理論と実践）の2科目である。のべ76の回答を得た。

§ 5.1 回答者の属性

回答者の所属学部・研究科を内訳でみると、所属部局は図 25 のとおりであり、毎年の教職課程受講者の学部比率をほぼ反映している。学年は図 26 のとおりであり、2回生が半分以上を占める。

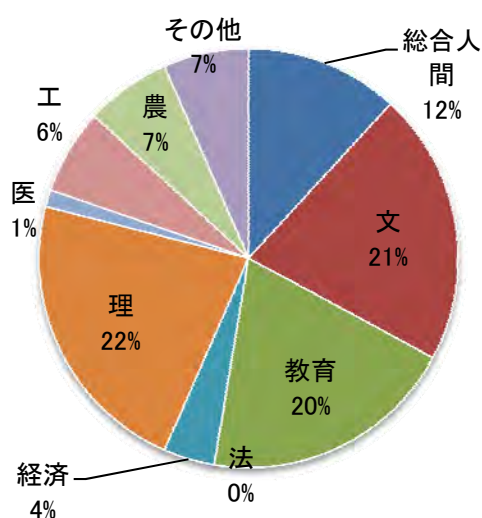


図 25 回答者の所属 (生徒指導科目群)

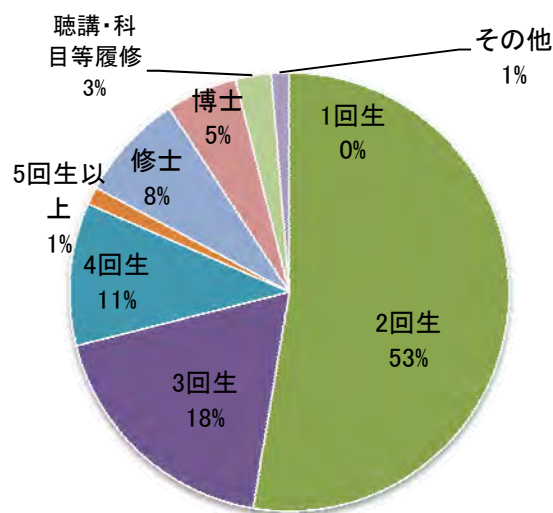


図 26 回答者の学年 (生徒指導科目群)

§ 5.2 アンケート全体の結果の分析

■問 1 の分析結果

図 27 に示すように、肯定的回答の比率が、「役に立った」で約 54%、「得たものがある」で 85%、「満足している」で 87%と、いずれも高い値を示している。これらは概論科目群と比較すると、「役に立った」「得たものがある」という有用度に関わる項目で 20%程度多くなっており、教科教育法科目群と似通った傾向を示している。学生に「役に立ち」「得たものがある」と評価されることは、この群の科目の目的にかなったものであるといえる。

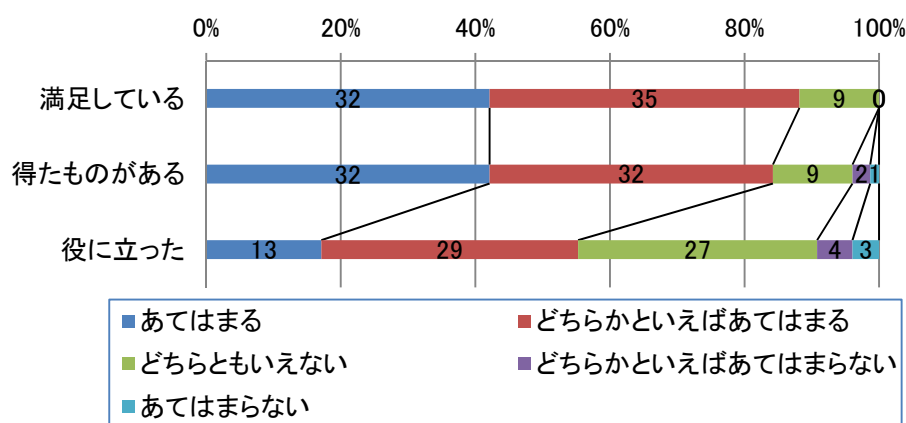


図 27 生徒指導科目群に対する全体的な評価

こうした肯定的評価を形成する要因を知るため自由記述を参照すると、学生は自らの日常生活と関連づけていることが分かる。「今バイトで担当している生徒に進路相談された時、学校の先生や親への不満があり話を聞いて欲しかったようだった。自分の考えを押し付けすぎないように気をつけて話を聞いていると満足してくれたようだった。」「カウンセリングという行為について様々に考えることができた。日常生活にも応用できる。」「実際、自分は教育系のバイトをしていて、この授業で学んだことを意識しつつ今のバイトを行っている。」「具体的に何か特定の場面で役立った訳ではないが、カウンセリングマインドの話は日常のコミュニケーションにも応用できる」「生徒への対応のあり方として教育相談について考えるところがあった。」「授業で学んだことを介護実習や日常生活に活かすことができた。」というものである。また、これまで受けてきた教育と関連づけた回答もある。「自分が経験してきたことにもかかわらず忘れてしまっているということに気づかされた。」「一見して「厳しい」と見える指導も、実は深い意味がかくされていることに気づきました。」「今までは自分が生徒の立場であったが、この授業で違った視点から考えられるようになった。」「自分がこれまで受けてきた教育課程を振り返るきっかけになった。いろいろな物事の意味を考えられた。」というものである。

■問2の分析結果

問2は、「この授業について」印象や感想について「あてはまるもの」を複数回答するものである。その結果を図に示した。他の科目群と同じく、やはり上位には肯定的評価を表す言葉が並ぶ。教科教育法科目群と同じく、「考えさせられた」がもっとも多く、76人中45人(59.2%)が選択している。第2位は、概論科目では1位であった「おもしろかった」であり、76人中42人(55.3%)が選択している。引き続き、35人(46.1%)が「考えが深まった」を選択している。選択率の上位の項目が60%~50%であるのは、概論科目と似た傾向を示している。

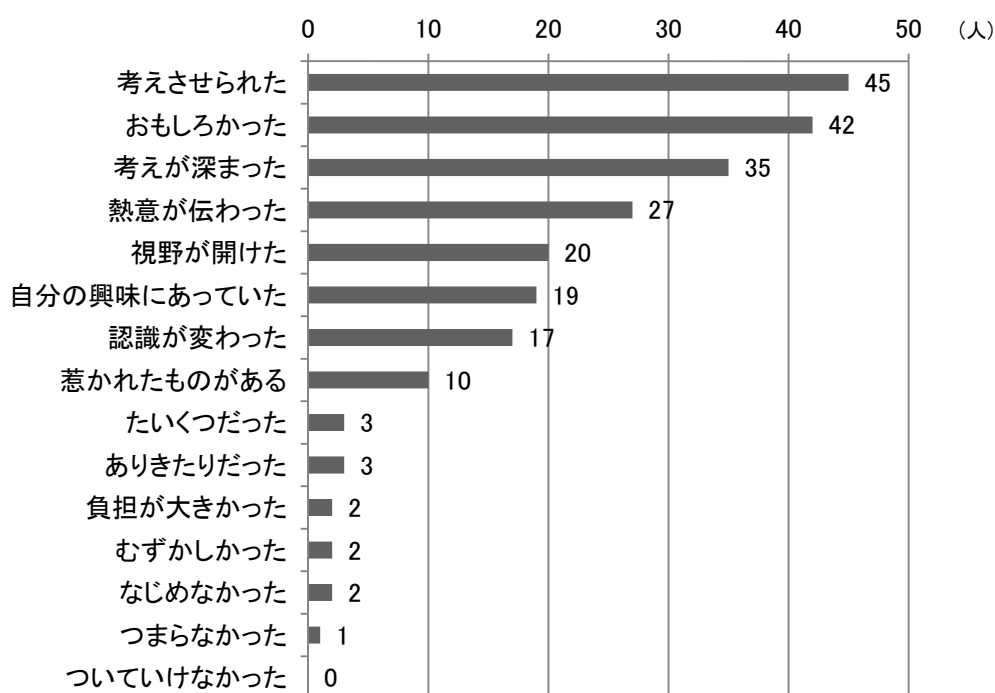


図 28 生徒指導科目群に対する感想・印象【複数回答】

■問3の分析結果

問3は、「この授業について『最も期待すること』、『次に期待すること』」を尋ねたものである。「最も期待すること」は、「知識や理解を深められる」ことで46人（61%）が選択している。また、「実践力を身につけられる」も43人（57%）が選択していることも特徴的である。「自分の問題意識を磨ける」も13人（34%）が期待することとして選択しており、概論科目群や教科教育法科目群に比較すると多くなっている。

これらを総合的に考えると、生徒指導関連の科目では、「知識や理解を深め」「実践力を身につける」と同時に、それらを「自分の問題意識」に関連させようとする姿勢があることが伺える。

表 5 生徒指導科目群の授業に期待すること

3. この授業に期待すること	最も	次に	総計
a. 知識や理解を深められる	31	15	46
b. 実践力を身につけられる	24	19	43
c. 自分の問題意識を磨ける	13	13	26
d. 主要な論点や最新動向に触れられる	4	12	16
e. 多面的な考察ができる	4	16	20
f. 自分の問題意識を検討できる	0	1	1
g. その他	0	0	0

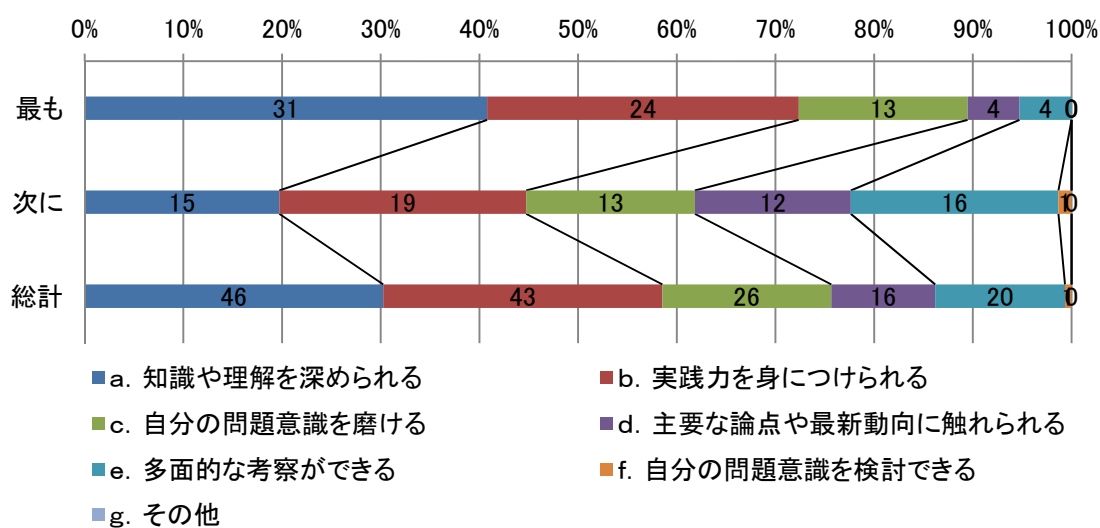


図 29 生徒指導科目群の授業に期待すること

■問 4 の分析結果

問 4 は「問 3 で選んだことからの達成度」を尋ねたものである。「達成できている」および「まあまあ達成できている」と回答した学生は合わせて 83% であり、アンケート全体と同じ傾向である。

細かくみると「達成できている」という回答が 21% にのぼり、概論科目の 14%、教科教育法科目群の 16% よりも、やや多くなっている。

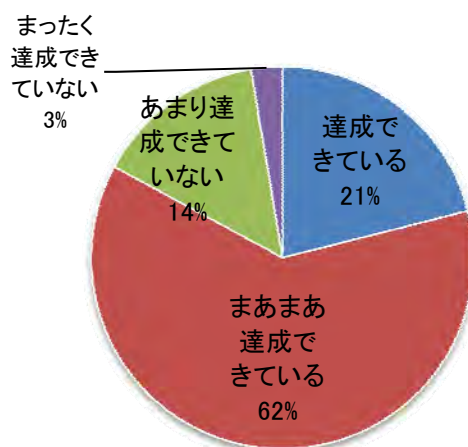


図 30 期待したことが達成できたか
(生徒指導科目群)

自由記述の分析

自由記述をもとに期待が達成できたことの原因を探ってみると、「自分の中で、何となく、たまっていたものが、言葉として整理されたから」「理論だけでなく、実践場面を知ることができるから」「実際の教育現場の様子と扱ったビデオ、あるいは最近のデータ等を授業に用いるから」「実践的な技法や姿勢についての話が聞けているから」「個々の授業内容と自分の想像できる教育現場を照らし合わせることで自分に何か必要かを考えることができる」「実際の例をたくさん紹介してくれて分かりやすいから」などといった、実際の教育現場との具体的な関連づけをもとに学べたとする意見が多かった。また、「毎回詳細なレジュメと丁寧な解説があり、理解しやすい」「先生のおっしゃる事例やビデオを見ながら、心がけるべきことを探することができるように思います」「ビデオが多用されていて目で見て分かりやすい」という、これらの科目群に共通する、具体的な教育場面に関する視覚教材の効果を述べるものも次に多かった。さら

に、「現在のニュースを、授業内容とからめて取り入れている」「全般的な知識（現在に至る経緯）と最新の動向が授業にしっかりと含まれているから」というように、時事のテーマを取り入れつつ授業がなされることが、挙げられていた。

■問5の分析結果

問5では、授業に対して「こころがけていること」を3つまで答えさせるものである。上位2つは、「欠かさず出席 48人」「問題意識と照らし合わせて理解 41人」で、講義科目、教科教育法科目群と同じである。第3位が「集中して授業を聴く 31人」となっている。

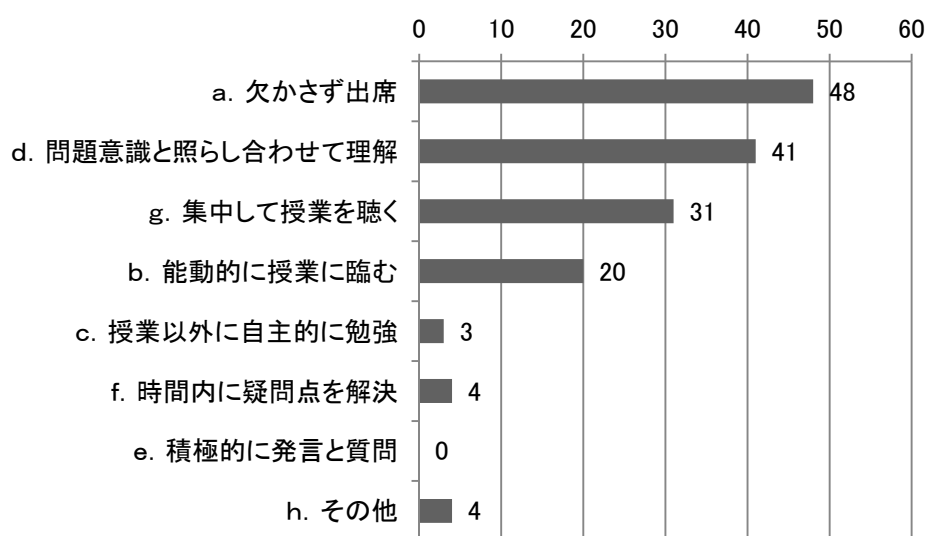


図 31 生徒指導科目群の授業に対してこころがけていること【三つまで】

■問6（問5の自由記述）の分析結果

問6では問5で「授業で心掛けていること」に対して、「工夫・改善したほうがいいこと」について自由記述で聞いた。

それによると「まず自分の問題意識が何なのかを明確にすること」「常に自分の意見を持ちながら聞く」「もっと授業外で本を読む」といった自身の能動的な態度に言及するもののほか、「レジュメが丁寧でわかりやすいことは「能動的に」授業を聞く上で、よしあしかなあと感じます」「講義→ビデオという流れが多いがビデオを見てからその内容について解説というものあっていいと思う」「学生にも意見を求める機会を増やしていくのはどうか」というものもあった。

■問7の分析結果

教師として必要とされる12の資質・能力について、生徒指導関連の授業を通して、どの程度得ることができたかを問うたものである。結果を図32に示す。

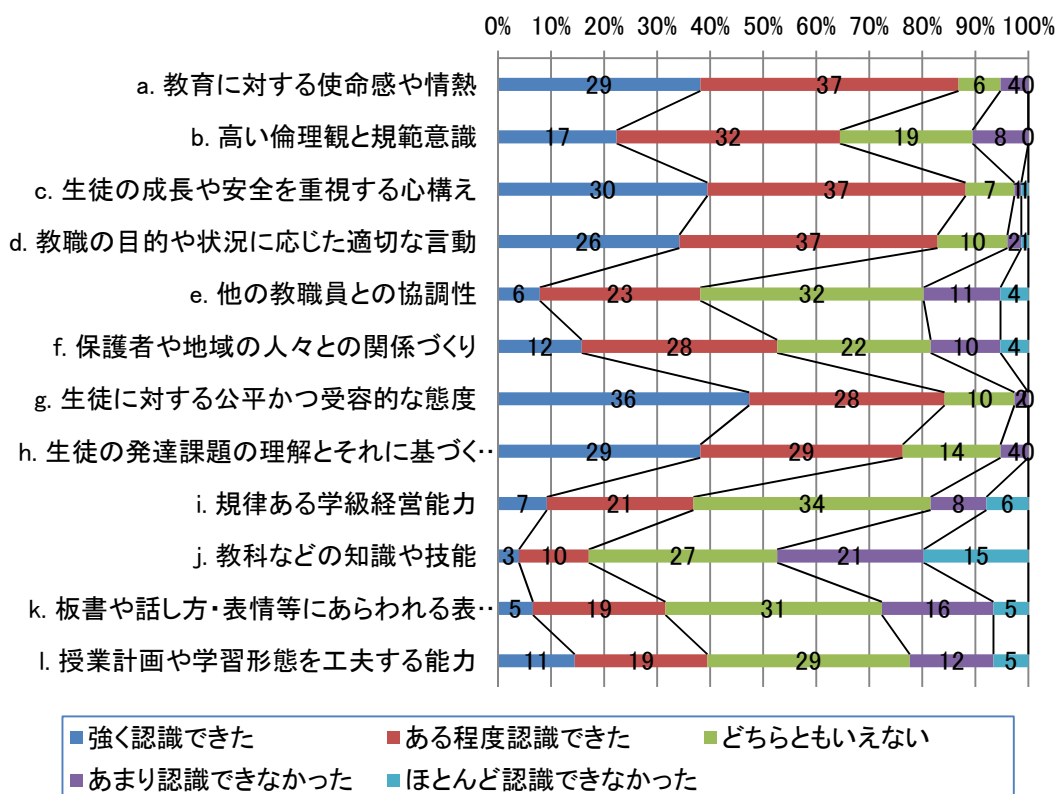


図 32 教師として必要とされる資質・能力がどの程度獲得・認識できたか
(生徒指導科目群)

これによると、「強く認識できた」「ある程度認識できた」を含めると「a. 教育に対する使命感や情熱 (66 人, 87%)」「c. 生徒の成長や安全を重視する心構え(88%)」「d. 教職の目的や状況に応じた適切な言動 (63 人, 83%)」「g. 生徒に対する公平かつ受容的な態度(64 人, 84%)」「h. 生徒の発達課題の理解とそれに基づく適切な指導(58 人, 76%)」が、いずれも、高い肯定的回答の比率を得ていた。これらはまさに、生徒指導科目群の目的に十分にかなうものである。

自由記述の分析

問 7(2)の自由記述では、上記以外で、この授業をとおして得られたと思う教師にとって重要な資質・能力について尋ねた、約半数の者が回答した。それによると、「生徒に対する観察力」「生徒の話聞く姿勢と能力」「生徒のことを理解する能力」「子ども 1 人 1 人のことを考えること」といった、生徒指導の基本にある姿勢を回答した者が多かった。また、「論理的思考能力・哲学」「真摯さ」「熱意」「授業に集中させる魅力のようなもの」というように、授業者のあり方から学んだと思われる回答もあった。

■問7に関する3つの科目群の相互比較

これまで既に、概論科目群、教科教育法科目群、生徒指導科目群それぞれにおいて、「教師にとって重要な資質・能力」がどの程度獲得できたか受講生が評価しているかをみてきた。ここではさらに、それらのデータを要約し3つの科目群の特徴を比較検討してみたい。

問7のa～jまでの各項目への回答は、「強く認識できた」に5点、「ある程度認識できた」に4点、「どちらともいえない」に3点、「あまり認識できなかった」に2点、「ほとんど認識できなかった」に1点を割り振り数値化された。ここで得られた評点に関して、科目の受講者数の影響がないよう(各科目の寄与が同等となるよう)、科目群ごとに加重平均を算出した。それをレーダーチャートで表したものが、図33である。

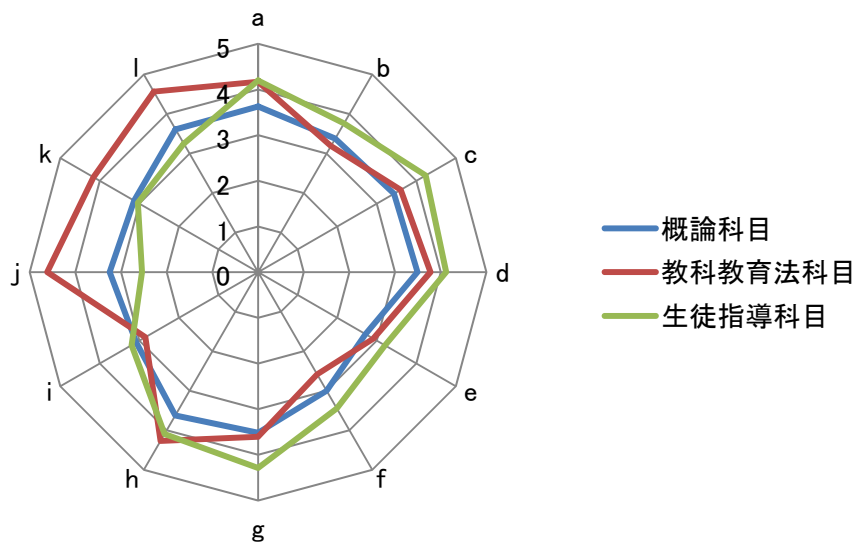


図 33 教師に必要な能力・資質をどの程度獲得・認識できたと思うか
(概論科目・教科教育法科目・生徒指導科目)

参考： a～l の詳細

- a. 教育に対する使命感や情熱
- b. 高い倫理観と規範意識
- c. 生徒の成長や安全を重視する心構え
- d. 教職の目的や状況に応じた適切な言動
- e. 他の教職員との協調性
- f. 保護者や地域の人々との関係づくり
- g. 生徒に対する公平かつ受容的な態度
- h. 生徒の発達課題の理解とそれに基づく適切な指導
- i. 規律ある学級経営能力
- j. 教科などの知識や技能
- k. 板書や話し方・表情等にあらわれる表現能力
- l. 授業計画や学習形態を工夫する能力

図 33 を参照すると、科目群全体を通して「e. 他の教職員との協調性」「f. 保護者や地域の人々との関係づくり」「i. 規律ある学級経営能力」において評定値が落ち込んでおり、「ある程度認識できた」(3点)に満たないことがわかる。これらの能力に関する事項は、どのような科目が担保しているのか、あるいは、担保していないとしたら、どの科目が担うよう調整するかが必要となるであろう。

このように、今回の授業評価を通して、教職科目全体のさらなる充実へ向けての示唆も得られたといえる。

□編集後記

今回で第 6 回目となった「学生による授業評価アンケート」では、はじめて京都大学が開講する教職教育科目を対象として調査を行いました。教職教育科目は常勤教員だけでなく非常勤の教員の担当も多いので、協力の依頼を行うところから、教務カウンターに貼紙やボックスを設けるなど、これまでにない試みとなりました。また教職教育科目は全学の学生が履修する科目であるので、履修登録者数に対する回答者数も 38.9%という、これまでにない低い回収率でしたが、それだけに回答者の属性も多様なものとなり、これまでとは異なる授業の側面を明らかにできたと考えています。調査に参加・ご協力いただいた多数の学生・院生の皆さん、本アンケートの対象授業として授業時間を使って全面的にご協力いただいた教職教育科目の担当教員の皆さんにお礼申し上げます。

今回のアンケートの分析は、平成 22 年度の部局自己点検・評価委員会の委員の分担によって行いました。委員長の杉本均が教職教育科目全般、山名淳准教授が概論科目群について、大山泰宏准教授が教科教育法科目群および生活指導科目群について分析を行い、本報告書にまとめています。結果としては教職教育科目全般についても、学生からの高い満足度の反応が見られたといえます。課題としてはやはり、教科教育法科目群や生活指導科目群のように教員と学生の個別的な指導を必要とする科目において、数十名というクラスサイズはその教育効果に大きな制約を課していることがあげられます。しかしそのような制約のなかで、教員は教材や教育方法を工夫することによって、何とか必要なコミュニケーションを確保しようという努力をしていることも明らかになりました。また本学の教職教育全体の理念を実現するうえで、個々の科目担当者がどのような役割を果たすべきなのかについての調整が今後の課題であることが強く感じられました。

今回の授業評価報告書の発行が諸般の事情により、大幅に遅れたことをお詫びいたします。アンケートの作成において、教職教育委員会の辻本雅史先生、田中耕治先生、西岡加名恵先生には様々な側面からのご指導をいただきました。またデータの分析・処理・グラフ作成・自由記述の処理にあたっては中池竜一助教および研究員のみなさまに大変にお世話になった。この場を借りて改めて感謝いたします。

(杉本 均)

2010 年度 教育学部・教育学研究科授業評価報告書

発行日：2011（平成 23）年 9 月 1 日

編集・発行：京都大学大学院教育学研究科・教育学部

印刷所：(株) 北斗プリント社